

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 2021年度国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」報告書

|       |                                                                                                                                  |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2025-05-21<br>キーワード (Ja): NDC8:161.3<br>キーワード (En):<br>作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002001631">https://doi.org/10.57529/0002001631</a>                                            |

## いまドキュメンタリーを撮るということ —寺院のCOVID-19対応から考える—

ティム・グラフ Tim Graf  
(マンチェスター大学講師)

---

### はじめに

本稿では、寺院のCOVID-19対応をテーマにしたビデオとその制作方法を紹介する。映像の単なる分析だけではなく、その成立過程も明らかにしたい。パンデミック状況下のフィールドワークにおける倫理的な問題をはじめ、ドキュメンタリー制作の計画、撮影の実施、編集の流れについて考察する。また、教育の手段としての「映像」の可能性を考え、映像の配信方法と注意点も明確にしたい。

ドキュメンタリーを撮るということは、ストーリーを語ることを意味する。筆者は、宗教研究のストーリーをドキュメンタリーとしてわかりやすく伝えることを目的としている。「仏教寺院がCOVID-19にどのような対応を取ったか」という疑問をもち、学術論文を執筆した<sup>(1)</sup>。しかし、論文と共にドキュメンタリーを公開することによって、論文の内容をさらに明らかにすることを目指している。私のドキュメンタリーの視聴者としては、主に日本の宗教文化を学ぶ学生が多いが、受講生以外の、日本の文化について詳しくない人々にも、宗教研究の魅力を説明することは重要だと考える。

### 対面とリモート実践の割合

COVID-19が日本においても拡大して以降、どのようにして宗教者は3つの密を避けるのかということについて、学者もメディアも宗教者のWeb法要やリモート瞑想などの可能性に焦点を当てた<sup>(2)</sup>。仏教者のオンライン活動も確実に増加してきた。宗派を超える「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」を担当した小川有閑（大正大学地域構想研究所研究員）はオンライン対応について、次のような調査結果を上げている。

「(9) 新型コロナウイルスの影響を受けて、新たにはじめたことがあれば教えてください」には244名が回答した。その中で最も多い回答は、オンライン対応で

あった。検討中を含めると半数近い112名がオンラインでの発信に取り組んでる<sup>(3)</sup>。

私も最初は、外出せずにパンデミックと仏教に関する記事をインターネットで検索した。また、メールやZOOMを通じてインタビューを行った。以前のフィールドワークで実際に会ったことのある僧侶と、インターネットを通じて連絡を取ることができたが、オンラインでは、寺院の実情を把握することに限界も感じた。親交のない僧侶に新たにオンライン・インタビューを依頼することも難しい。そのため、2021年の春からは遠方の寺院ではなく、当時住んでいた名古屋市および愛知県を中心に、寺院の現状を調査した<sup>(4)</sup>。結果として、実際に現場に入る重要性、教育におけるドキュメンタリーの必要性も改めて理解することができた。事例として、名古屋の大須の商店街にある万松寺を紹介する。

## 亀岳林万松寺

亀岳林万松寺（きがくりんぱんしょうじ）はかつて、武将の寺だった。戦国時代の1540年に、織田信長の親族によって創建された。当時武士以外の、裕福な人々も檀家として認められていたが、檀家の総数は約20軒のみで、一般の人々は入檀することができなかった。現在は、万松寺に10階建てのオフィス・ビルも併設されている。物価が高く、人通りの多い大須の商店街にある人気の寺院である。

万松寺は近年まで曹洞宗の寺院であったが、4年ほど前に独立し、単立寺院となった。万松寺は15年ほど前から納骨堂も設置し、現在はおよそ7000軒の家が契約者となって、永代供養を行っている。現代的な納骨堂をはじめ、現世利益信仰の場所としても有名である。一番人気があるのは不動明王を祈りの対象とする護摩祈祷である。その他、坐禅や写経が行われ、「大人の寺子屋」という法話会もほぼ毎週開催される。祭りや年中行事も大人気だ。例えばスジャータまつりが毎年12月に開催されている。私も2018年、パンデミックの前に一度見学した。

スジャータまつりは釈迦が悟りを開いた日を祝う行事である。スジャータとは、伝説によると、釈迦を救った女性だ。厳しい修行で衰弱した釈迦が、スジャータに乳粥をもらって助けられ、菩提樹の下で坐禅を行って悟りを開いた。この伝説をテーマにしたスジャータまつりでは、ミルクが無料で振る舞われる。コップに願いを書き、ミルクをもらい、そしてコップを戻すという流れには祈願の要素も含まれる。Meiraku（スジャータめいらく）が祭りのスポンサーとなったのは偶然ではない。大須のアイドルグループも参加し、アイドルたちにもコップを渡して、願いを書いてもらうということが行われる。その後、集められたコップは後日、護摩祈祷において焚かれる。仏教の伝説と実践を現代的な様式においてクリエイティブに行っていることが万松寺

の特徴だといえよう。

COVID-19感染拡大の影響で、2020年のスジャータまつりも、2021年の祭りも中止された。パンデミックが全国の寺院や神社、観光地に経済的な負担を及ぼす状況が現在においても続いている。仏教寺院の場合、葬送儀礼の変更を余儀なくされている。葬儀の多様化と簡素化は、決して新しい現象ではない<sup>(5)</sup>。しかし、パンデミックとともにさらに進行し続けていく。再び小川有閑によると、パンデミック下における葬儀の簡素化は特に首都圏において進行している<sup>(6)</sup>。ソーシャルディスタンスを守るために質素な葬儀が増え、パンデミック発生前には大規模な葬儀の場に関わっていた役僧が失業してしまうこともある。

しかし、パンデミックの状況において、祈祷の依頼が実際に増加してきたケースもある。万松寺の場合、健康に関連した祈祷の需要が以前より30～40パーセント上昇したという。

## 万松寺のコロナ対策

万松寺のコロナ対策について、「御朱印や写経、ネットでゲット」という記事が、朝日新聞デジタル（2020年4月29日）に掲載された。

「自粛ストレスの軽減にと始めたのが、家でお経を書き写したり、仏画に色をつけたりする「写経・写仏（しゃぶつ）チャレンジ」。寺のウェブサイトから素材をダウンロードできる。[...]できあがったら名前と住所を書いて寺へ郵送するか、境内の納経箱へ納めれば、後日、お焚（た）き上げ祈禱（きとう）をし、カード型お守り（縦5センチ、横3センチ）がもらえる。自粛要請が終わる頃合いを見て、終了する。」<sup>(7)</sup>

私は「これは面白い」と思い、これらの実践について調べるため、2021年春に万松寺に問い合わせた。しかし、意外なことに、万松寺の住職は、寺院での対面およびリモートでの活動のあり方について、記事に書かれていることとは、やや異なる反応を見せた。住職によれば、確かに記事に書かれたような活動もしているが、コロナ対策としては、むしろ寺院における対面での活動を優先しているという。筆者によるインタビューの際には次のように説明していた。

写経とか写仏というのは、コロナですけど、コロナ対策として相手が来てもらっています。リモートワークではなくて、ここにきて、実際に広い場所でやっていただいて何かをしています。インホームでやるとき、それでメンタルが本当に集中

できるのかというと、人はちょっと難しいようで、やはり場所を変えて、コンディションを変える事で、専念することは、要因になるんだろうと私は考えたので、広いホールの中で10人ほどでやっていただくという方法を今はコロナの中などにあえてお呼びしています。

更に、坐禅もインホーム、つまり寺院において対面で行う活動として議論されたが、万松寺の坐禅会の参加者たちも、同様に寺院において坐禅を行うことの有効性を主張した。これらを受けて、筆者はコロナと仏教をテーマとして、授業で利用できるような短編のドキュメンタリーを作成することにした<sup>(8)</sup>。

以上のように、万松寺の関係者を対象とするインタビューと彼らの宗教実践の撮影が宗教学への様々な問いを明確にすると考えている。一つ目は、オンラインと対面の役割についてだ。フィールド調査を行うことによって、すなわち現場から見た仏教を研究することによって、オンライン実践と対面活動のそれぞれの意味付けがわかるようになる。万松寺の場合、驚くべきことに、感染のリスクがあるにもかかわらず、オンラインや家でできる活動より、寺で行う実践の方が大事であると住職も参拝者も指摘した。しかし、彼らの声はニュースに取り上げられていなかった。二つ目は、教義と実践の役割、あるいは実践の場所の意味についてだ。次に宗教とモノの文化をテーマに考察する。

## 宗教とモノの文化

祈祷など現世利益のための宗教実践や、葬儀や祖先祭祀の実践にも、特定の施設、特定のモノの文化が必要だ。たとえば、換気を行う装置がないと、堂内の護摩祈祷も行うことができない。さらに、万松寺の納骨堂においては、あの世に対するイメージが、視覚的文化でどのように伝わっていくかという疑問がある<sup>(9)</sup>。納骨堂の天井にはランプが飾られているが、住職によれば、二つのオレンジ色のボールは平和な魂を象徴する。納骨堂を選ぶ際にデザインで決める人々がいるのも事実だ。

モノの文化というのは、教義の単なる象徴だけではなく、宗教そのものを積極的に形成してきたものだ。もちろん、仏教教義の研究も重要だが、ある教えがどのような形で伝わるかという問題も存在する。宗教におけるモノの文化、物質文化が、宗教概念への意味付けをはじめ、救いや癒しなどの実現にどのような役割を果たすか、宗教学の重要な課題である。ビデオの撮影を通して、宗教のビジュアル文化、つまりモノの文化の視覚的な側面を撮ることができる。これを分析することは、宗教概念の見直しにもつながるのではないだろうか。



写真1 平和な魂を表すライト（万松寺の納骨堂）



写真2 位牌と墓が一体となって設置され、ここに関わる人々のコミュニティを形成している（万松寺の納骨堂）

## ドキュメンタリーの制作過程

### 【倫理・許可・内容の確認】

最初に万松寺を訪れた際、ビデオ撮影を依頼することを控えた。オンライン記事によると、万松寺はコロナ対策としてリモート実践を行っていたため、オンライン実践について、「ZOOMや電話を利用して聞くことができるか」というように尋ねたが、ご厚意により対面にて対応してもらった。マスクを着用し、十分に換気が行われている広い部屋で、ソーシャルディスタンスを保ちながら、インタビューを行うことができた。本稿はその内容を取り上げたものである。また、研究を進めるため別の機会にビデオインタビューを依頼した。

私個人の見解だが、パンデミックでなくても、最初からビデオ撮影を依頼することは避けた方が良いと思われる。まず挨拶をして、お互いの信頼関係を構築してから撮影の機会について検討するべきだ。その際に研究計画をまとめて、撮った映像の利用について共有する。私は、ビデオをインターネットで公開する前に、万松寺の担当の方に事前に確認してもらった。確認を得るのに時間を要したが、これは後のトラブルを避けることにもつながる。

論文と大きく異なる点だが、ビデオにおいては、インタビューの内容に合わせ、それに対応した宗教実践を撮影することが必要となる。例えば、インタビュー中に祈祷の話がなされたならば、それに合わせて祈祷が実践されている様子を撮影することが望ましい。坐禅や写経も同じだ。そのため、何度も万松寺に足を運び、祈祷大会や朝の坐禅なども撮影した。

### 【プライバシーと著作権の問題】

宗教施設の風景や実践を撮る際に、人の顔がカメラに写り込んでしまうことについてどうすべきか、数多くの研究者が頭を悩ませているのではないだろうか。感染のリスクと同じく、プライバシーに関わるリスクの感覚が人によって違うため注意が必要だ。寺院の撮影の許可を得るのはもちろんだが、参拝者の撮影の許可も必要だ。担当者の申し出で、突然の撮影に対し許可がおりることも多くあり、参拝者には撮影後許可を取ることもある。いずれにせよ参拝者のプライバシーの保護に気を付けるべきだ。

プライバシーの問題への対策として、レンズが交換できるカメラが撮影に向いているように思われる。ビデオの編集時に顔が見えないように加工することはできるが、あまりきれいではない。これに対して、そうしたカメラを用いることで、編集ではなく、撮影中に対策ができる場合がある。たとえば、フォーカスや「ボケ」を利用して、プライバシーを守るための対策が、撮影中にもある程度できることになる。

事例（写真3）において、フォーカスは僧侶の顔に合わせられているが、背景はレンズボケではっきり見えないようになっている。これは撮影後の編集の際に追加した画像効果ではなく、レンズとカメラの設定によるものである。アパーチャー（絞り）、フォーカス、ISO感度などをマニュアル・モードで設定すれば撮影の際のコントロールが可能になる。ただし、場合によってはレンズのNDフィルター（サングラスのようなもの）が必要になるので、練習は必要である。



写真3 写り込んだ人物のプライバシーをレンズボケで守っている事例

また、画像の解像度によって、編集時に拡大することもできる。この方法を利用して万松寺のビデオでは顔が見えないように編集した（写真4）。

元の映像では、歩く人の顔が見えたが、クロップして画像の一部を切り出すことによって顔がフレームに入らないように調整した。

しかし、そもそも映像の解像度に留意しておくべきだ。元の映像を4K（3840×2160）の解像度で撮影するならば、その映像を1080pのプロジェクトおよびタイムラインに乗せることで、編集時に拡大することも可能になる。逆に、1080pで撮影した元映像を1080pのタイムラインに乗せて編集すると、解像度が足りないので拡大した際に映像のクオリティが落ちてしまう。

さらに、著作権違反を避けるのも重要である。撮影中にラジオから音楽が流れていれば映像として使えなくなってしまう可能性が高く、事前に対策を取らなければならない。より良いクオリティの映像を撮影するためには、エアコンやストーブ



写真4 クロップして顔を見せないようにしている事例

なども事前に運転を停止させておくことが望ましい。通常であればエアコンのような生活音は気にならないが、カメラで撮影すると音が目立つこともあるのである。

### 【カメラとマイクの選び方という妥協】

最新のスマートフォンならカメラの性能も良い。ただし音声については、ビデオ専用のカムコーダーを除いて、ほとんどのカメラのマイクの性能はドキュメンタリーには不十分である。撮影の実施と使用機材の選択を考慮すると音声も重要である。性能が良いマイクでも、屋外で使用すると雑音が入ってしまって、撮影ができなくなってしまうこともあるため、事前に十分にテストしておくことが望ましい。音量が足りない場合、ある程度編集集中に修正することもできるが、雑音はうまく修正できない。そのため、マイクにウィンドノイズ削減機能を持つフィルターを付けたりするなど、撮影前に準備しておくべきこともある。

宗教施設にかかわるフィールドワークの撮影は、多くの場合「ランアンドガン」(run and gun) の撮影であり、静止しての、あるいは動きが少ない撮影ではない。そのため、カメラ、レンズ、三脚、ジンバル、マイク、ライト、メモリーカード、バッテリーなどのギアを、現場や自分のニーズに合わせて選択する必要があることになる。それらのギアのレンタルは可能ではあるが、使い慣れていなければ、高価で高性能なカメラをレンタルしたとしても、撮影に使うにはリスクが高い。単純に、高いカメラで撮影すれば、より良い映像が撮れるようになるということではない。

多くの場合、カメラより投光やライトの利用の仕方の方が重要である。カメラの設定について知識を持って慣れ親しんでおくことや、撮影現場の事情に合わせて適切にライトを利用することは、良い映像を撮影するのに不可欠であり、これについては定期的に撮影と編集を行って練習しておくことが必要であると考えている。宗教文化に関係するフィールドワークと撮影においては、インタビューを除いて、ほとんどの場合ライトのコントロールはできないだろう。結果として、理想の画質にならなくても、手元にあるギアを可能な限り活用して撮影することが、実地での体験的な学習となるのである。

映像を撮ることは、妥協することを意味する。カメラの選択も、妥協の産物である。例えば、本格的なシネマカメラを使用すれば最も美しい映像を撮影できるが、不便なところも多くあり、購入してそのまま使うことは難しい。場合によっては外付けのバッテリーやモニターも購入しなければ実際には使用できない。また、三脚やジンバルの利用を前提としたシネマカメラでは、スタビライザーはないため、手持ちでの撮影には練習が必要で、手振れの問題が起こりやすい。逆に、近年は写真にも映像にも使えるハイブリッドカメラの機能が圧倒的に進化してきており、これはフィールドワークでの使用に向いている。日本のどのメーカーも、適切にビデオ撮影を行うことができるカメラを多く出すようになっている。

写真用のレンズが手元にあれば、それに合わせてカメラを選ぶことも考えられる。将来は別のカメラを使うとしても、レンズについては、そのまま利用することができる。そのため、カメラよりむしろレンズの方を重視すべきだと考える。しかし、それも妥協につながる。例えば、カメラのメーカーによってはマウントが異なり、カメラのモデルによってはセンサーサイズも異なるため、結果として特定のカメラしか選べなくなるだけではなく、場合によっては特定のメーカーの環境やエコシステムに入らざるをえないことになる。最近では、フルサイズのカメラが人気を集めている。見た目によって流行しているだけでなく、感光性が良いため暗い時でもきれいな映像を撮ることができるなど、確かに良い点があるが、しかし高価で重いフルサイズのレンズしか使えないなど、不便な点もある。結局のところ、自分のニーズに合わせてカメラを用意する必要があるだろう。

最後に、データ管理も重要なテーマになる。現在は8Kや12Kの撮影は可能となったが、4Kにしても、解像度やコーデック、すなわち映像のデータの圧縮に合わせたメモリーカードの処理速度に注意し、また編集するパソコンの処理能力や記憶媒体の容量も必要となる。また、カメラによっては、利用できるメモリーカードも制限される。プロのシネマカメラの世界ではメーカー専用のメモリーしか使えないケースも少なくない<sup>(10)</sup>。

12-bit RAWや10-Bit ProRes 422などの動画圧縮の少ないファイルで撮った

映像は色彩の補正とカラーグレーディングに最も有用である。ファイルサイズは大きいがパソコン用の編集で使いやすい。しかし、カメラ本体側でのファイル保存にCFexpress タイプ B等のカードが必要となる。カメラとデータ圧縮の種類によって異なっているため注意が必要となる。3時間のRAW撮影に使えるCFexpress タイプ Bのカードは、現在でも10万円以上するため、カメラの予算に計上しておく方が良いだろう。逆に、RAWではなく高圧縮率のデータ圧縮方式を用いると、撮影データのファイルサイズが小さくなり、処理速度の遅いSDカードでも撮影可能だが、そうすると編集するパソコンの処理の負担が増えるというジレンマに陥る可能性は高い。

以上のように、カメラ、センサー、レンズ、レンズマウントとマイク等のギアを総体として考えることに加えて、データ管理や編集用のパソコンも予算に含めておくことは、ドキュメンタリー制作において適切なアプローチであろう。特定のカメラを選ぶ問題だけでなく、そのエコシステムの限界はどこにあるか、つまり周辺のパーツが交換できるか、別のメーカーのカメラでも利用できるかどうかを考慮することは、ギアを持続的に使用していくことができるかという問題の答えにもつながる。

### 【編集・オーディエンス・配信】

次に、動画の編集と公開についても若干考察したい。Blackmagic Design のDaVinci Resolve、Adobe のPremiere Pro、そしてAppleのFinal Cut Proという3つの編集ソフトが世界で最も人気があり、プロにも使われているものである。近年は、スマートフォンで映像を編集することのできるソフトも増えたが、制限が多くあるため、やはりパソコンやノートパソコンにおいて編集することが望ましい。どのようなソフトであっても、基本的な流れとしては、まずはビデオやオーディオのデータを読み込むことから始まる。そして、映像をカットすることによって、ストーリーを形作っていくことになる。その際に、ストーリーを語るための道具は、論文とは異なり、言葉だけに限定されず、映像で見えるもの、サウンド、音楽と色調補正（カラーコレクション）の後のカラーグレーディングをも含む。最後に、完成したビデオを書き出すことで終了となる。

編集の具体的な紹介は本稿の枠を超えるが、編集のすべてを、ストーリーを語るための道具であると理解すれば、編集の意義と課題が明確になるであろう。例えば、ストーリーに関していえば、誰のために語るかという問題がある。視聴者のニーズに合わせて、字幕を付けたり、内容を説明したりするか、あるいは監督の立場を隠すためにそれを行うか、編集という行為には多くの可能性が含まれている。ナレーションをビデオの後に追加して、解説を補足することも考えられる。筆者にとっては、

授業で使いやすい動画を制作するのが目的となっている。これまで数本のビジュアル・エスノグラフィーを制作しており、そのうち東日本大震災をテーマにしたものは、ワルシャワなどの国際映画祭で上映され、チューリッヒ国際映画祭では Golden Eye Award にノミネーションされた。様々な上映会に参加し、また学術大会などで上映と解説を行って、視聴した研究者たちとのやり取りから分かったのが、視聴者の中には日本の専門家もいる一方で、日本の文化について詳しくない者も多くいるということである。このことから、今では様々な視聴者の立場を想像して編集することを目指している。

近年は、撮影や編集の手段が増えると同時に、オンライン・ストーリーミングの機会も増え、直接ネットで公開するのが主流となりつつある。筆者は、去年前までは学術関係のビデオをすべて Vimeo にアップロードしていたが、最近では YouTube 上で公開している。YouTube が Google と繋がってアクセスしやすい大規模なプラットフォームになっているからという理由に加えて、継続性にも魅力があると考えている。継続的にビデオが公開されていることによって、フィールドワーク全体の展開が可視化されるようになり、ビデオを通じて今後の研究や作成中の論文のテーマも紹介することができる。特定のテーマについてのシリーズも作成して公開することが可能となる。単体で独立した映画としてのドキュメンタリーにも魅力があるが、宗教文化の継続性を撮影していくことにも意味がある。宗教文化をより深く撮影できるような方法を考え、2021 年に日本の宗教文化を撮るために始めた YouTube チャンネルを今後も育てていきたい。

## おわりに

本稿では、万松寺の COVID-19 対応に焦点を当てるビデオを例に、4 つのテーマを紹介して考察した。1) パンデミック状況下の宗教実践におけるオンラインと対面の役割の実情を把握するためにフィールド調査が必要だと主張した。2) プライバシー保護等にかかわる倫理的な問題を、ビデオの制作過程で解決する方法を幾つか示した。さらに、3) 教育の手段としての「映像」の可能性を検討し、教義と言葉の枠組みを超え、宗教をモノの文化から見ることによって宗教学を問い直すことを試みた。最後に、4) ドキュメンタリー撮影を検討している人への具体的なアドバイスとなるよう、カメラ選びの問題から映像の配信まで、編集の流れをまとめた。

これまで、映像を撮ることはストーリーを語ることでありと紹介したが、最後に、記録としての映像の意義を述べておきたい。時が経つとともに、宗教文化に対する見方が変わっていき、信仰と実践の文脈も社会の変化とともに変わっていく。例えば、震災のナラティブがいかに変化してきたか、10 年以上前に撮ったドキュ

メンタリーを観ることで驚くほど伝わってくる。当時、どのような時代精神、あるいはツァイトガイストがあったのか、どのように日本の宗教の未来と震災復興の発展が予想されていたのか、あるいは当時のインタビュー対象者たちは、どのような希望を持っていたのか。またそれを後から見て、視聴者が生きている社会的な現実とどのように結びつくのか、などといったことを考えることができるだろう。時間と空間の流れが感じられることには、教育的なメリットがあるのではないだろうか。

津波の直後だからこそ、パンデミックの最中だからこそ、ドキュメンタリーを撮ることによって、次の世代に当時の影響や宗教者の対応を記録して伝えることができる。筆者は現在、イギリスのマンチェスター大学の講師として日本の宗教と、仏教についての授業を担当しているが、日本でドキュメンタリーを撮りためておいてよかったと思っている。映像と論文の力で、3.11の時にまだ子どもであった受講生たちに当時の事情を多少なりとも理解してもらうことができる。COVID-19が日本の宗教と社会にどのような影響を与えるかについて、これからも研究が必要であり、ここで紹介したビデオをその小さな、しかし前に進むための一歩としたい。

#### 注

- (1) Graf, Tim (2021): "Japanese Temple Buddhism during covid-19." *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture* 45: 21-47.
- (2) 例えば次の記事を参照: "Leap of faith: Japan's religious institutions get innovative in pandemic," *Japan Times*, 2021.3.20. <https://www.japantimes.co.jp/news/2021/03/20/national/social-issues/religious-institutions-get-innovative-amid-covid-19/>
- (3) 小川有閑「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査③」(大正大学地域構想研究所ウェブサイト、2021.2.1 公開)。  
[https://chikouken.org/report/report\\_cat06/11572/](https://chikouken.org/report/report_cat06/11572/)
- (4) コロナの影響と仏教者の対応をテーマとした研究について、日本私立学校振興・共済事業団より研究助成を得た(「新型コロナウイルスの影響と仏教」日本私立学校振興・共済事業団 2021年度若手研究者奨励金。研究代表者: GRAF Tim)。
- (5) Rowe, Mark (2000): "Stickers for Nails. The Ongoing Transformation of Roles, Rites, and Symbols in Japanese Funerals." *Japanese Journal of Religious Studies* 27 (3-4): 353-378.
- (6) 小川有閑「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査②」(大正大学地域構想研究所ウェブサイト、2020.10.15 公開)。  
[https://chikouken.org/report/report\\_cat04/11296/](https://chikouken.org/report/report_cat04/11296/)
- (7) 小林圭・村上潤治「御朱印や写経、ネットでゲット:名古屋・万松寺が提供」『朝日新聞デジタル』2020.4.29. <https://www.asahi.com/articles/ASN4X764QN4TOIPE00N.html>
- (8) コロナと仏教についてのビデオをオープンアクセスで公開している。
  - ・「コロナ禍の状況下祈りと瞑想【万松寺、その2】」: YouTube <https://youtu.be/iYcPBQ3BLy8>
  - ・"Prayer & Meditation during COVID-19 at Banshōji in Nagoya, Japan": Vimeo <https://vimeo.com/598900412>

- (9) 万松寺の納骨堂をテーマにしたビデオをオープンアクセスで公開している。
- ・「万松寺の納骨堂【万松寺、その1】」: YouTube <https://youtu.be/iv6Tngwf4yU>
  - ・“Consecrating a new Buddha Statue and opening a new indoor temple grave [Banshōji, part 3]”: YouTube <https://youtu.be/0-lmROMG1Ho>
- (10) 例えば、Red というメーカーのカメラを用いる場合には、同メーカー専用のメモリーが必要となり、同メーカーの、いわゆるエコシステムに入ってしまうことになる。